Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-01

ＳＦは他者を理解しそこない、ゆえに他者と出会い続ける進化論、ヘプタポッド、ミモイド、人工神経制御言語

難波，優輝

(Citation)
美学芸術学論集,17:88-102

(Issue Date)
2022-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81013310

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013310

研究ノート

ＳＦは他者を理解しそこない、ゆえに他者と出会い続ける
進化論、ヘプタポッド、ミモイド、人工神経制御言語

難波優輝
Yuuki NAMBA

1　関係性のまずしさ?

「ＳＦは人間を描けていない」と言われる。ＳＦジャンルをネガティブに特徴づけるのは、キャラクタの平板さ、キャラクタ同士の関係の単純さだ。

比較のために、正統な文学といわれうるものを取り上げよう。例えば、ジェーン・オースティン『高慢と偏見』。作品の主役は、キャラクタたちだけではなく、パイ生地のように重ねられたキャラクタたちの心の動きだ――エリザベス・ベネットのフィッツウィリアム・ダーシーに対する思い、その思いをダーシーがどう感じているか、ダーシーがどう感じているかについてベネットがどう思っているか、この思いに対するダーシーの思い。ある種の文学を特徴づけるのは意図に対する意図、態度への態度、志向性に対する志向性といった高階な関係性だが、こうしたものはＳ

Ｆジャンルでは表立っては描かれない。

それも当然だ。なぜなら、ＳＦは基本的にダイアローグのジャンルだからだ。ＳＦの骨格には、異質な世界や存在者に対する主人公の遭遇がある。ＳＦでは地底世界、宇宙、テクノロジー、壮大な自然現象といった世界の驚異、新たな種族、新たな生命体といった異質な存在者――新事象との出会いの驚異の感覚が物語を駆動する。つまり、こうした新たな存在やイベント＝新事象とキャラクタの二項関係が優位なジャンルなのだ（cf. Suvin, 2016: 20）。

主人公が出会う異質な世界やキャラクタ。彼らの形相や振る舞いは奇矯で斬新だが、意外と常識的なのは彼らの「心」だ。それゆえ、彼らとの「関係性」もシンプルになりがちである。闘争か共存か。極端に言えば、ＳＦに出現する関係性はこの二種類に代表される。逆に、ル・グィンの『闇の左手』のように関係性に焦点を当てた作品はＳＦの魅力的な別の流れを作り出してもきた。

ＳＦが心や関係性に関心を払わないこと。これは思ったよりも奇妙なことである。というのも、わたしたちは現実において他者を理解し、他者同士の関係性を知ることに喜びを感じるのである。それが虚構であっても。進化文学研究の中では、フィクションを楽しむことを介して他者の心を欺き予測するシミュレーションを行うのだとされることもある（Vermule, 2010; Boyd, 2010）ように、フィクションには豊かなキャラクタの心が描かれ、キャラクタ同士の関係が味わわれる。これがスタンダードである。

だとして、ＳＦのこの逸脱は何か。たんなるアノマリーか？ そうではない。ＳＦのこの逸脱した関係性の平板さにこそ、わたしたちの他者理解の特徴が――裏返しの形で――密かに刻み込まれているのだ。

2　火星人の進化論的な心

SFの中の他者との関係性を、古典的なSF作品から考え始めてみよう。H・G・ウェルズ『宇宙戦争』（一八九八年）では、人類より優れた科学技術を持つ火星人がロンドンに襲来する。突然のことに逃げ惑う人類を蹂躙する。これは火星人と人類の闘争関係を描いていることになろうか？

いや、侵略者と人類はいかなる関係も結んでいないのだ、少なくとも、わたしが関心を持っている関係とは、あくまでダーシーとベネットの間に生じるような心のコミュニケーションの意味を含むのだから。

火星人たちは極端に肥大した脳を持ち、毒ガスや熱線を発する高度な科学技術を匂わせるトライポッドに搭乗し、人間を吸血のための食料として扱う。しかし、彼らは人間を入植のために邪魔な雑草を刈り取るように扱う。根源的に人間に無関心な存在なのだ。

これに対して、その技術力に見合った適切な知性と機知がいささかも描かれていない。ただ冷酷で獰猛な存在として描かれている点をSF作家・批評家スタニスワフ・レムは指摘する。「私が苦々しく思うのは」とレムは言う。

> 火星人に文化というものが全く欠けていることである。〔……〕この小説の火星人は、一つの集団として描かれている。性別はなく、発芽によって増殖し、極めて即物的な共同作業――もちろん地上においては、惑星をうまく征服するための軍事的な共同作業――で用いられる倫理以外の倫理を知らない。行動の動機や思考といった点で、いわゆる手段としての価値へとこうも徹底的に還元される存在はまずありえない。〔……〕ウェ

ルズは、火星人を攻撃的で純粋な機能主義へと還元した。あたかも彼ら自身がプログラム化された機械であって、巨大な脳ではないかのように。このことから判断すると、ウェルズは、超人的な地球外生物による文明がどのようなものでありうるのかといったことに、明らかに無関心だったと私は思う（レム、二〇〇四年、三〇〇-三〇一頁）。

ここではコミュニケーションの二項関係すら成立しない。火星人にはコミュニケーションを成り立たせるようないかなる心も帰属されない。

他者に心を帰属させるということ。それは認知心理学的・認知詩学的な語彙で言えば、心的モデリングと呼ばれる活動だ。心的な表象を作成・シミュレートし、人々が持つ素朴な心理理論とそれらを組み合わせる心的モデリングによってわたしたちの他者理解は行われる（Spaulding, 2018）。

わたしたちは自分の心のシミュレーションを使って他者を理解している。わたしたちは日常的にわたしたちのものではない信念、欲望、情動を想像しシミュレートすることで他者を理解する。他者の行為を理解するために「彼女の立場ならこういう信念と欲望と情動があり、すると、ああして行為したのだろう」と他者を理解する。

スマホに時折目を向けながら、あちこちをきょろきょろと眺めている人がいたとする。わたしたちは自分が初めての土地に訪れたときにスマホに時折目を向けながらあちこちをきょろきょろと眺めるだろうなと、そのときには誰か道に詳しい人に話しかけられると助かるだろうなと想像する。その人に話しかける。「いかがしましたか？」。もちろん、虚構の中の他者に対しても現実の他者と同様の心的モデリングがなされている。

わたしたちは、融和可能性を微塵も感じない闘争機械としての火星人に立ち向かう。ここにウェルズの達成と失敗がある。『宇宙戦争』が当時のヨーロッパによる他国への侵略＝探検の図式を逆転させている挑戦に眼を向けよう。これまでの冒険小説には、より劣った存在を人間が発見するテーマが通底しており、その背景には西洋と非西洋の優越性の勾配が潜んでいた（Fitting, 2000）。ウェルズはあらかじめ西洋を優越的に非西洋に対置する歪められ認識論化された進化理論を西洋それ自体に適用する。それにより俗流進化論のグロテスクさを露にする。だがこの試みにも関わらず、異星人＝異種族人＝外国人＝エイリアンの図式、理解不能でかつ自分たちと同じような心的モデリングを読み込む対象ですらない完全に異質な他者として他者を描いてしまう危険を火星人の表象は彼の意図なしに体現している。

逆転させたはずの西洋対非西洋の俗流進化論的適用に対抗する防波堤にはならず相変わらず種間の優越のモチーフは保存され続けてしまっている。『宇宙戦争』の中で火星人から逃げてきた主人公は誇大妄想的な砲兵に出会う。彼は俗流進化論に基づき、ロンドンに地下に潜り新たな人類のコミュニティを作り上げる闘争の計画をぶち上げる。

> おれたちがしなくちゃいけないことはなんです？ 人間が生きて子供をもうけ、その子供を無事に育て上げられるような生活を作らなくちゃいけない。〔引用者注：人類の血を栄養源とする火星人によって家畜化され〕飼い馴らされた連中は、みんな飼い馴らされた動物みたいになるでしょう。二、三世代のうちに、大きくて、見た目が良くて、脂が乗ってて、頭が空っぽの――屑になるんですよ！〔……〕人生はまた本物になるんです。役立たずや、足手まといや害になるものには死んでもらいます。そんなやつらは死ぬべきなんだ。進ん

で死ぬのが本当なんです。けっきょく、生きて種族の血を汚すのは、裏切りみたいなもんですから。（ウェルズ、二〇〇五年、二六七-二六八頁）

人間を種族へと切り詰めて行く思考は、露骨な形ではなくとも主人公の思考にも侵入している。冒頭と最後には繰り返し進化論的モチーフによって火星人の心を理解しようとする[1]。結局、わたしたちのコミュニケーションは俗流進化論的な闘争原理的認識論に還元されてしまう。火星人の心は不可知ではなく、語り手と読者によって限なく理解されている。彼らは「プログラム化された機械であって、巨大な脳ではないかのように」。心的モデリングは火星人に対しては適用されず、ただ、戦いだけが人類と彼らの交点となる。

3　無口な異客たち

ＳＦにおける異質な他者の問題系を対比的な形で描く作家もいる。異星人とのいっけん幸福な相互理解にいたることもある。二〇一六年に『メッセージ（原題：Arrival）』として映画化されたテッド・チャンの中編「あなたの人生の物語」（二〇〇二年）では、「一個の樽が七本の肢に接続されて」「まぶたのない七個の眼」が頭の全周に配置されている無機質な宇宙人ヘプタポッドとの交信を、彼らの超技術である「ルッキンググラス」という果てしなく離れた場所を繋ぐ窓を介して言語学者、ルイーズ・バンクスが解読していく物語であり、最終的にルイーズはヘプタポッドの言葉を学ぶことを通じて、ふつうの人間とは異なる世界理解にたどり着く。つまり異時間の共在を知覚できるよ

うになる――作者自身が言及するようにカート・ヴォネガット・ジュニア『スローターハウス5』を想起させる。ルイーズはこれから起きることを一挙に知ってしまっているのだ。彼女はいずれ自分に娘が誕生することを知る。だが、彼女は二五歳で彼女が愛したクライミングの事故で死ぬことも知る。知ってしまっているルイーズはしかし夫と出会い娘を産むことを決意する。

あなたが三歳のとき、わたしたちは急な螺旋階段をのぼっていて、わたしたちはあなたの手をとびきりかたく握りしめているでしょう。あなたはその手をふりほどいてしまう。

「自分でのぼれるもん」

とあなたは言い張って、それを証明しようとわたしから離れてのぼりだし、わたしはあの夢を思いだす。あなたの幼児期を通じて、わたしたちはそんなふうな場面を数かぎりなく反復することになる。あなたの反抗的な気性を考えれば、あなたを守ろうとするわたしの努力がクライミングへの愛着を育んでしまうのだと信じてもいいような気がする。最初は児童公園のジャングルジム、つぎは近所の緑地帯に生えている木々、そしてクライミング／クラブの岩壁、最後は国立公園の断崖絶壁――。（チャン、二〇〇三年、二五八頁）

あらかじめ失われる未来を描く美しいチャンの物語の中にはトリックが潜んでいる。それは主人公にヘプタポッド言語理解を達成させることで主人公が娘を失うことへの向き合いを可能にする点にある。読者は主人公の人間的な時間との和解を理解できるために、その言語理解を適切なものとみなしてしまう。心的モデリングの可能性への楽観

的なビジョン。ウェルズの火星人とは対象的に闘争ではなく人間主義的なレッスンへと収束していく――ヘプタポッドたちは人類の言語を熱心には学ばない代わりに親切にも言語学者のフィールドワークに協力的である――が、その説得力には疑義を提示すべきだ。ここには心的モデリングの過適応、強く擬人化された異星人がちらついている。

4　心を読んでくる海

心すら帰属されないウェルズの敵対的な火星人と、人類に贈り物をするチャンの友好的なヘプタポッドは、現実の他者理解の両極の鏡写しに思えるが、奇妙に共通する点がある。それは、わたしたちの心への彼らの無関心である。

彼らは喋らない。火星人にせよヘプタポッドにせよ小説作品の中で彼らに「」は与えられない。小説というメディアにおいて括弧で区切られた文字は窓のように直接キャラクタの声を伝え、キャラクタを読者と想像的に相互作用可能な他者として際立たせる。しかし、問題の異星人たちは(作中の語り手やキャラクタに対する発話らしきものがあっても)読者が心的モデルを組み立てるための合図を出してはくれない。読者は作中での事態がどうであれ、異星人たちから話しかけられていないことを暗黙のうちに理解する。読者が異星人を覗こうとしても窓は閉じられている。ルッキンググラスは閉じられている[2]。

二つの物語において、わたしたち読者は異質な他者がわたしたちを理解しようとしないだろうと、適切に想定する。彼らには声がなく、声は読者には向けられていないから。現実において声のないモノに対してそうであるように、彼らがわたしたちに対して心的モデリングを行わないと知るやいなや、わたしたちは彼らをコミュニケーション可能な

他者としては扱えなくなってしまう。確かに彼らは他なるものだ。しかし、彼らはわたしたちに無関心である。無関心な彼らとわたしたちの心はすれ違うこともできない。

先の両作品は人類側からの異星人への心的モデリングの失敗と過剰な成功を描く。対してレムが『ソラリス』において強調するのはわたしたちの心的モデリングではなく、ソラリスの海という、心の有無すらあいまいであるが、しかし、わたしたちに対して異質な仕方で心的モデリングを行おうとする存在であることはここでもっとも重要になる。

ソラリスもまた読者に直接、語りかけることはない。この作品では、ソラリスの調査に訪れた者たちに奇妙な来客が訪れる。それは彼らがもう二度とは会えないような人が、彼らとの別れの記憶を失って蘇って会いに来るのだ。それは幽霊ではなく、ソラリスによって作り出された何かであり、キャラクタたちの依代を介してわたしたちに語りかけるようである。つまり、擬人化された他者。

『ソラリス』で描かれるのは、コミュニケーションの不可能性についての微妙なラインの探索である。もし圧倒的な他者がいたとしたら、それらはそもそも他者に対する心的モデリングを構築するような存在なのか。ここには二つの他者理解のレベルがある。一方で、人間的なレベルにおいて、おなじみの人種差別的な他者の格下げと格上げとが表裏一体となっているような心的モデリングの読み込まなさ、心的モデリングを読み込んでこんでいないことをもって他者を人間から排除するレベル。他方で、他者の問題系をまじめに受け止め、人間的なレベルを超えて、他者が人間的な心的モデリングを行わずにわたしたちとコミュニケートしようとする可能性への考察。後者の意味でのわたしたちとは異なる理解のスタイルを持つ他者の可能性をソラリスの海は体現しようとしている。

第一に、ソラリスは擬人化された他者のレベルで、他者はわたしたちを確かに理解しようとしている、心的モデリングを組み立て続けている。しかし読者によって、そして主人公によって、それは何らかの偽物であることが了解されてしまっている。人間的なレベルでの他者理解の問題系を離れて、純粋に、超人間的なコミュニケーションの問題系へと読者を連れて行く。それは火星人との進化論的闘争ではなく、そしてヘプタポッドからの言語的レッスンでもなく、互いに目的も定かではない他者同士が、言語と非言語を介して声を送り合おうとするステージである。

コミュニケーションの倫理においては、わたしたちが他者に対して心的モデリングを行う試みと達成のみならず、その前提条件、他者がわたしたちを心的モデリングしようとする意図への信頼や希望、あるいは想像が鍵になる。

他者との遭遇にはソラリスとの関係で描かれる不可知と無視の領域での留まりが要請されるだろう。レムによってはソラリスとのコミュニケーションがわたしたちの満足を与えるようには描かれ得なかったとしても。そこには適切にコミュニケーションの限界が描かれている。わたしたちは心的モデリングの限界について再考を促され続ける。単に他者をモデリングするのでもモデリングを止めるのでもなく、そして、他者からのモデリングをないものとするのでもなく、モデリングを失敗することを確信しながら稼働させ続けること。心的モデリングの倫理があるとすればその出発点は異星人の心的モデリングのモチーフから始まる。

5　嫌悪を催す理解

こうした強い他者とのコミュニケーション不全に対してわたしたちは安心して絶望できる。しかし、弱い他者、

つまり同じ人間であるにもかかわらずわたしたちが理解できないような、何より、理解したくないような他者とのコミュニケーションにおいて、先程のコミュニケーションの倫理は自壊していくのではないか。

長谷敏司による「allo, toi, toi」では、少女メグを強姦し殺害した小児性愛者が擬似神経制御言語ＩＴＰを埋め込まれ矯正治療が行われる。ＩＴＰの実験を行うリチャードは、「アニマ」という服役中の小児性愛者チャップマンの理想の少女を脳内に住まわせることで、彼の小児性愛を治療しようとする。

「でも、俺は子どもが好きなんだ」

「どうしても子どもじゃなきゃダメ？」

「どうしてもじゃない。でも、子どもほど素晴らしいものは世界中にない。みんなだってそう言ってる。子どもは未来で、子どもは若さで、可能性で、純粋さで、純血で、無垢な愛情だ。子どもを好きにならないなんて無理だ。社会が子どもを好きになって欲しがってる。今さら、好きになるななんて言うな」（長谷、二〇一四年、一四三頁）

神経言語を介してチャップマンと接続しているリチャードは、自分自身の判断がチャップマンによる侵食を受けていることに気づき始める。

開けていた窓から風が入った。朝の日差しの中、娘が美しく、大切で、艶やかなものに感じられた。

だから近づいて、やわらかなカーブを描く薄い褐色の額に、手を置いていた。
「パパのことが好きか？」
娘に、ことばに重畳されたものを読み取ることなどできるはずがない。
「うん」
リチャードたちは、言語コミュニケーションで理解できていない伝達内容を受け容れられるかどうかは、「好き嫌い」――受け手の興味しだいだとしている。だが、「興味」は目を向けさせるだけで、それが理解されるかとはまた別だ。このため、言語による情報整理では、明らかに消化できないもの、興味から「好き――自分にとってよい」だと錯覚して丸呑みする状況が起こる。誤解や誤読は、言語が必然的に起こすエラーなのだ。
「パパのこと、好きだよ」
そして、チャップマンがメグを殺すに至った錯誤も、言語のエラーだ。リチャードの首に脂汗が浮かんでいた。
意識すらしないうちに、ごく自然に、引き寄せられるようにしゃがみ込んで、子供と目線を合わせていた。娘の、妻に似た一途な切れ長の瞳を覗き込んでいた。（長谷、二〇一四年、一五五-一五六頁）

読者の心的モデリングは適切に行われていくほどにキャラクタへの嫌悪を増していく。結局小児性愛者に罰が下されるが、何らの開放感もない。そして、同情も湧いてこない。それは読者がチャップマンが持つ心的モデリングの不快さを半ば理解してしまっているがために、共感が切断されているからだ。

心的モデリングが可能であっても理解できるわけではない。理解できたとしても共感できるわけではない。長谷の本作は他者理解の複層を明確化し、理解の力の限界を仄めかす。理解できたとしても共感し難い他者をどう扱うべきか。もはや無知ゆえに異常者として切り捨てることも、無知ゆえに仲間として迎え入れることもできない。この中途半端な理解の状態こそディスコミュニケーションの倫理の通常モードであり、引き続きわたしたちが不快にも他者と出会い続けなければならない地点である。

おわりに——SFの他者理解からわたしたちを考える

火星人たちの吸血イメージ、冷酷な生物にも関わらず高度に知性的である存在を描くことで、ウェルズは進化論的恐怖をわたしたちに適用することを可能にする。ヘプタポッドとの交流は、他者の贈り物を期待させる。ソラリスの認識論的愉快さはメタ的な位置にある。そして、理解できないものに触れてしまったという嫌悪はわたしたちの理解の限界を不快な形で押し広げる可能性を持っている。しかし、この認知的な拡張を楽しんでもいる点に物語のレッスンが潜んでいる。

註

1 ウェルズ自身がどの程度俗流社会進化論を信じていたか。少なくとも彼自身はそうした社会進化論を否定しているようである。だが彼の後年のユートピア小説や社

会批評には、人類に対する安易な社会進化論の適用――弱者の排除と強者の繁殖――のテーマが抜き難くまとわりつく（小澤、二〇一八）。

2 直接話法の心理的効果の分析がなされている（Eerland et al. 2013）。しばしば言われるような直接話法のヴィヴィッドさは心理実験によっては確かめられなかった。代わりに直接話法は「」を話している当の発話者への関心をもたらすとされる。それは発話者への心的モデリングの適用を促すだろう。反対に間接話法は報告者の方に読み手の注意を促す（Eerland et al. 2018）。この点で特に「あなたの人生の物語」において、ヘプタポッドではなく報告者のルイーズに焦点が当てられていることが確認される。

参考文献

- Boyd, B. (2010). *On the origin of stories: Evolution, cognition, and fiction*. Harvard University Press.（ブライアン・ボイド『ストーリーの起源』小沢茂［訳］、国文社、二〇一八年）
- Eerland, A., Engelen, J. A., & Zwaan, R. A. (2013). "The influence of direct and indirect speech on mental representations". *PloS one*, 8(6), e65480.
- Eerland, A., Zwaan, R. A., Vazire, S., & Therriault, D. (2018). "The influence of direct and indirect speech on source memory". *Collabra: Psychology*, 4(1).
- Fitting, P. (2000). "Estranged invaders: The war of the worlds". *In Learning from other worlds: Estrangement, cognition, and the politics of science fiction and utopia*, Duke Univ Pr, 17, 127–145.
- Goldman, A. I. (2006). *Simulating minds: The philosophy, psychology, and neuroscience of mindreading*. Oxford University Press.
- Spaulding, S. (2016). "Simulation theory". In: *The Routledge handbook of philosophy of imagination*, Routledge, 262-273.
- Stockwell, P. (2019). *Cognitive poetics: An introduction*. Routledge.
- Suvin, D. 2016/1979. *Metamorphoses of science fiction: On the poetics and history of a literary genre*. ed. Canavan, G. Peter Lang.（ダルコ・スーヴィン『SFの変容

――ある文学ジャンルの詩学と歴史』大橋洋一［訳］国文社、一九九一年。）
・Vermeule, B. (2010). *Why do we care about literary characters?* JHU Press.
・Zunshine, L. (2006). *Why we read fiction: Theory of mind and the novel*. Ohio State University Press.
・小澤正人『ユートピアの誘惑――H・G・ウェルズとユートピア思想』三恵社、二〇一八年。
・チャン，テッド「あなたの人生の物語」『あなたの人生の物語』所収、公手成幸［訳］早川書房、二〇〇三年。
・長谷敏司『My Humanity』早川書房、二〇一四年。
・レム，スタニスワフ「H・G・ウェルズ『宇宙戦争』論」井上暁子［訳］『高い城・文学評論』国書刊行会、二〇〇六年。
・――.『ソラリス』沼野充義［訳］早川書房、二〇一五年。
・ウェルズ，H・G.『宇宙戦争』中村融［訳］東京創元社、二〇〇五年。